

六朝樂府詠注（二十五）——「洛陽道」十首——

小川恒男

はしがき

『樂府詩集』卷二十三には「漢横吹曲」として「洛陽道」二十首を収め、その内の十八首が六朝樂府である。本稿には梁簡文帝蕭綱一首、梁元帝一首、沈約一首、庾肩吾一首、車𨔵一首、陳後主五首の計十首の詠注を掲載した。十八首すべての詠注を作成したかったのだが、いつもながらの力及ばず、間に合わせることでできなかった。

南朝の詩人たちの多くは生涯にわたって洛陽の街を直接目にする機会を得られなかったかと思うが、彼らはそのまだ見ぬ大都会を年若い男女が出逢う場としてしばしば描き出す。彼らにとつて洛陽は「佳麗」の地だったのである。六朝詩に見える洛陽のイメージについては、橘英範氏「六朝詩に詠じられた洛陽——樂府『洛陽道』を題材として」（岡山大学文学部プロジェクト研究報告書10『洛陽の歴史と文学』二〇〇八）に詳細な分析があり、本稿を作成する際にも参考にさせて頂いた。

「ボーイ・ミーツ・ガール」といった華やかな題材に

相応しく、簡文帝、元帝、さらに陳後主など文壇の中心となった権力者と、その取り巻きたちがこの樂府題で詩作を行っている。誰のどの作品が同じ時、同じ場で作られたのか特定することは難しいが、簡文帝、元帝、徐陵、庾肩吾の作からはかなり密接な関連性を見出すことができるように思う。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

梁・簡文帝蕭綱「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|----|----------------------------|
| 1 洛陽佳麗所 | 洛陽 | 佳麗の所 |
| 2 大道滿春光 | 大道 | 春光滿つ |
| 3 遊童時挾彈 | 遊童 | 時に彈 <small>はじき</small> を挟み |
| 4 蚕妾始提筐 | 蚕妾 | 始めて筐 <small>かご</small> を提ぐ |
| 5 金鞍照龍馬 | 金鞍 | 龍馬を照らし |
| 6 羅袂扶春桑 | 羅袂 | 春桑を扶ふ |
| 7 玉車爭曉入 | 玉車 | 争ひて曉に入り |
| 8 潘果溢高箱 | 潘果 | 高箱に溢る |

8 「潘」、「類聚」誤作「滿」。「箱」、「英華」作「廂」。

【押韻】

「光」「桑」、下平十一唐韻。「筐」「箱」、下平十陽韻。陽・唐同用。

【作者】

五〇三～五五一。武帝蕭衍の第三子、南朝梁の第二代皇帝。在位五四九～五五一。名は綱、字は世績。昭明太子蕭統の弟。昭明太子が早世すると後を継いで太子となった。侯景の乱で建康が陥落した後、餓死させられた武帝に代わり、侯景によつて即位を強制されたが、実権は侯景が握り、単なる傀儡に過ぎなかった。五五一年、侯景を討とうとする王族たちの軍に敗れた侯景は、建康に帰還するや簡文帝を廢して元の晋安王とし、皇太子を始めとする簡文帝の子供たちを抹殺し、昭明太子の孫でまだ幼かった子章王蕭棟を位に即けた。その二ヶ月後、晋安王蕭綱は侯景に殺された。

彼は自らも詩文に優れ、十八年間に及ぶ太子時代を中心に、徐摛・徐陵父子、庾肩吾・庾信父子などを集めて文学サロンを形成した。彼らの軽艶な詩風は「宮体」と呼ばれた。また多くの恋愛詩を集めた『玉台新詠』は彼の命で編集されたものである。

【語釈】

【日本語訳】

- 1 洛陽は男女が出逢う美しいところ
- 2 広い道には春の気配が満ちている
- 3 遊びに出掛ける若者はちようど弾き弓を手に
- 4 蚕を飼う娘は桑の葉を入れるかごを提げている
- 5 黄金の鞍が駿馬を輝かせ
- 6 薄絹の袖が春の柔らかな桑の葉をかすめる
- 7 玉で飾った立派な車が競うように明け方の街に入ってきて
- 8 潘岳と同じように投げ込まれた果物が馬車の台にこぼれんばかり

【校勘】

- 『玉台新詠』卷七・『芸文類聚』卷四十二・『文苑英華』卷百九十二・『古詩紀』卷七十七・『漢魏六朝百三家集』
- 0 「洛陽道」、「玉台」作「和湘東王横吹曲三首・洛陽道」、「詩紀」「百三家集」同。『類聚』作「洛陽道詩」。
- 3 「時」、底本注云「一作『初』」。『英華』作「初」、而注云「一作『時』」。
- 5 「照」、『英華』注云「一作『被』」。
- 6 「袂」、『類聚』『英華』皆作「袖」、『英華』注云「一作『袂』」。
- 7 「曉」、『玉台』『類聚』『英華』『詩紀』『百三家集』並作「晚」。

1 洛陽佳麗所 2 大道滿春光

〔洛陽〕南朝詩人が描く洛陽は多くの場合が漢魏の洛陽城のイメージが用いられる。植木久行編『中国詩跡辞典―漢詩の歌枕』（研文出版 二〇一五）に「漢魏洛陽故城」後漢・（曹）魏・西晋・北魏の四王朝三百数十年間、都城となった遺跡の名。隋唐洛陽城（東都。現・洛陽市）の東一五、賤弱、白馬寺の東一、賤、北の邙山と南の洛水（洛河）の間に位置していた（洛陽市洛龍区白馬寺鎮の東）。洛陽の名も本来、洛水の陽を意味する。との説明がある。

〔佳麗〕非常に美しい。建物や都市を形容するのに用いられることが多い。三国魏・曹植「又贈丁儀王粲」詩（『文選』卷二十四）に「從軍度函谷、驅馬過西京。山岑高無極、涇渭揚濁清。壯哉帝王居、佳麗殊百城。（軍に従ひて函谷を度り、馬を驅りて西京を過ぐ。山岑高くして極り無く、涇渭 濁清を揚ぐ。壮なるかな帝王の居、佳麗なること 百城に殊なる。）と見えるが、これは「西京」、即ち長安を形容する。また、美女の意でも用いる。晋・陸雲「為顧彦先贈婦」詩四首其二（『文選』卷二十五。『玉台』卷三）に「佳麗良可美、衰賤焉足紀（佳麗 良に美すべく、衰賤 焉くんぞ紀すに足らん）」（「美」、『玉台』作「羨」）とあり、李善注は『戦国策』中山作に「（司馬喜）見趙王曰、『臣聞趙天下善為音佳麗人之所出也』。（司馬喜）趙王に見えて曰く、『臣 聞く 趙は天下の善く音を為し、

を采り、從臣の嘉頌を第（い）と見える。詩では、梁・費昶「和蕭洗馬画屏風」詩二首（『玉台』卷六）其一「陽春發和氣」に「蚕女桂枝鉤、遊童蘇合彈（蚕女 桂枝の鉤、遊童 蘇合の弾）」と蚕を育てる女性との対で現れる。

〔挟弾〕弾き弓を手を持つ。『戦国策』楚策に「莊辛対曰、『…。黄雀因是以。俯囓白粒、仰棲茂樹、鼓翅奮翼、自以為無患、与人無争也。不知夫公子王孫、左挟弾、右撰丸、将加乎已十仞之上、以其類為招。昼游茂樹、夕調乎酸醎』（莊辛 対へて曰く、『…。黄雀 是れに因る以。俯して白粒を囓み、仰ぎて茂樹に棲み、翅を鼓ち翼を奮ひ、自ら以為く患ひ無く、人と争ふ無きなりと。知らず 夫の公子王孫の、左に弾を挟み、右に丸を撰り、将に己に十仞の上を加へ、其の類を以て招と為さんとするを。昼は茂樹に遊ぶも、夕べは酸醎に調へらる。』と、公子王孫の遊びとして描かれる。こ

こは、後でもう一度引く『晋書』潘岳伝に「岳美姿儀…、少時挟弹出洛陽道。（岳 姿儀美にして…、少き時 弾を挟みて洛陽道に出づ。）」とあるのを意識するだろう。

〔蚕妾〕蚕を飼う女性。蚕を養うために桑の葉を摘む。『春秋左氏伝』僖公二十三年に「（重耳）将行、謀於桑下。蚕妾在其上、以告姜氏。姜氏殺之、而謂公子曰、『子有四方之志、其聞之者吾殺之矣』（重耳） 将に行かんとし、桑下に謀る。蚕妾 其の上に在り、以

佳麗なる人の出づる所なりと』。」とあるのを引く。この詩はボーイ・ミーツ・ガールの物語なので、美しい女性がいる都市の意を含むかもしれない。左に見る沈約「洛陽道」にも「洛陽大道中、佳麗実無比（洛陽 大道の中、佳麗 実に比ひ無し）」と。

〔大道〕広い道。太平御覽卷百九十五に引く晋・陸機「洛陽記」に「宮門及城中大道皆分作三。中央御道、両辺築土牆、高四尺余、外分之二。唯公卿尚書章服、道從中道。凡人皆行左右、左入右出。夾道種榆槐樹。此三道四通五達也。（宮門及び城中の大道 皆な分ちて三と作す。中央の御道、両辺に土牆を築き、高さ四尺余、外に之れを分く。唯だ公卿尚書のみ章服し、道 中道に従ふ。凡人 皆な左右を行き、左は入り右は出づ。道を夾みて榆槐の樹を種う。此の三道 四通五達するなり。）」との記述が見え、右に引いた沈約「洛陽道」にも見え、次の梁元帝蕭繹「洛陽道」にも「洛陽開大道、城北達城西（洛陽 大道開き、城北より達城西に達す）」とある。

〔春光〕春の眺め、気配。沈約「鍾山詩応西陽王教」詩（『文選』卷二十一）五章其三に「春光發黿首、秋風生桂枝（春光 黿首に發し、秋風 桂枝に生ず）」と。

3 遊童時挾弾 4 蚕妾始提筐

〔遊童〕外出して遊ぶ若者。班固『西都賦』（『文選』卷一）に「采遊童之謹誦、第從臣之嘉頌。（遊童の 謹誦

て姜氏に告ぐ。姜氏 之れを殺して、公子に謂ひて曰く、『子 四方の志有り、其の之れを聞く者 吾 之れを殺す』と。）」とあり、宋・鮑照「紹古辭」七首其二に「昔与君別時、蚕妾初献糸（昔 君と別れし時、蚕妾 初めて糸を献ず）」とある。

〔提筐〕桑の葉を入れるかごを提げる。梁・吳均「擬古」四首（『玉台』卷六）「陌上桑」に「蚕饑妾復思、拭淚且提筐（蚕 饑ゑて 妾 復た思ひ、涙を拭ひて且く提筐を提ぐ）」とある。「筐」は竹製の四角いこ。ここは漢・宋子侯「董嬌饒」に「不知誰家子、提籠行采桑（知らず 誰が家の子ぞ、籠を提げて行ゆく桑を采る）」とあるのを意識するだろう。

5 金鞍照龍馬 6 羅袂扶春桑

〔金鞍〕黄金で作ったような立派な鞍。梁武帝蕭衍「襄陽白銅鞮歌」三首（『玉台』卷十）其三に「龍馬紫金鞍、翠眊白玉羈（龍馬 紫金の鞍、翠眊 白玉の羈）」と。〔龍馬〕大きくて立派な馬。『周礼』廋人に「馬八尺以上為龍。（馬 八尺以上を龍と為す。）」とあり、謝朓「送遠曲」に「方衝控龍馬、平路騁朱輪（方衝に龍馬を控へ、平路に朱輪を騁す）」と。

〔羅袂〕絹の袖。曹植「洛神賦」（『文選』卷十九）に「羅袂を抗げて以て涕を掩ひ、涙 襟に流れて浪浪たり。」と見える。

〔春桑〕春の桑の葉。『後漢書』礼儀志上に「祠先蚕、礼

以少牢。」とあり、梁・劉昭注は漢・衛宏『漢旧儀』に「春桑生而皇后親桑於苑中。蚕室養蚕千薄以上。祠以中牢羊豕、祭蚕神、曰苑窳婦人・寓氏公主、凡二神。」（春桑 生じて 皇后 桑を苑中に親らす。蚕室には蚕千薄以上を養ふ。祠には中牢羊豕を以て蚕神の苑窳婦人・寓氏公主と曰ふを祭る。凡そ二神。）とあるのを引く。沈約『三月三日率爾成篇』（『文選』卷三十）には「長袂屢以私、彫胡方自炊（長袂 屢しば以て私ひ、彫胡 方に自ら炊ぐ）」とあり、李善注は「楚辭」大招に「長袂私面善留客只。（長袂 面を私ひ善く客を留む。）」とあるのを引く。王逸注は「袂、袖也。私、拭也。」と。また、簡文帝には「雉朝飛操」に「不如隨蕩子、羅袂私臣衣（如かず 蕩子に随ふに、羅袂 臣の衣を私はん）」との句がある。

7 玉車争曉入 8 潘果溢高箱

「玉車」玉で飾った豪華な車。漢・楊雄「甘泉賦」（『文選』卷七）に「敦万騎於中营兮、方玉車之千乘。（万騎を中營に敦ね、玉車の千乗を方ぶ。）」とあり、李善注に「玉車、以玉飾車也。（玉車、玉を以て車を飾るなり。）」と。六朝詩には他の用例は見当たらない。

「争曉入」明け方に先を競うように入つて来る。『史記』孟嘗君列伝に「君独不見夫趣市朝者乎。明旦、側肩争門而入。（君 独り夫の市朝に趣く者を見ずや。明旦、肩を側て門を争ひて入る。）」（『趣市朝』、原作「朝趣

市」。王念孫『讀書雜誌』史記第四云、「引之曰、『朝趣市』、当作『趣市朝』。朝音潮、下文『過市朝者』、即承此文言之。」と見える。
「潘果」潘岳が乗った馬車に投げ込まれた果物。『晋書』潘岳伝には右に引いた文に続き「婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而帰。（婦人 之れに遇へば、皆な手を連ねて縈繞し、之れに投ずるに果を以てし、遂に車に満ちて帰る。）」と見える故事による。
「高箱」身分が高く名を知られた人の乗る車の台。『東觀漢記』郭丹伝に「郭丹」自去家十二年、果乘高車出関、如其志焉。（家を去りてより十二年、果して高車に乗りて関を出で、其の志の如くす。）と見える。

梁・元帝蕭繹「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 洛陽開大道 洛陽 大道を開き
- 2 城北達城西 城北より城西に達す
- 3 青槐随幔私 青槐 幔に随ひて私ひ
- 4 緑柳逐風低 緑柳 風を逐ひて低る
- 5 玉珂鳴戰馬 玉珂 戰馬に鳴り
- 6 金爪關場鶏 金爪 關場の鶏
- 7 桑萎日行暮 桑 萎みて 日 行ゆく暮れんとし
- 8 多逢秦氏妻 多く逢ふ 秦氏の妻

【日本語訳】

簡文帝を擁する侯景に対抗した。外からは西魏の侵攻を受け、王室内部の抗争もあつて、在位二年あまりで没した。『金楼子』六卷をはじめとする多くの著作がある知識人であり、詩作もよくした。

【語釈】

- 1 洛陽開大道 2 城北達城西
- 3 洛陽開大道」簡文帝「洛陽道」参照。

3 青槐随幔私 4 緑柳逐風低

「青槐」「大道」の両側に植えられ、春、青々とした葉が繁るエンジュ。右の簡文帝「洛陽道」の第2句「大道」の語釈に引いた陸機「洛陽記」にも「夾道種榆槐樹。」と見えた。

「随幔私」馬車が走るのにつれ、エンジュの葉が馬車のカーテンをかすめる。「幔」は車幔、梁・何遜「車中見新林分別甚盛」詩に「隔林望行幔、下阪聴鳴珂（林を隔てて行幔を望み、阪を下りて鳴珂を聴く）」と見える「行幔」のこと。また、梁簡文帝蕭綱「戲作謝惠連体十三韻」詩（『玉台』卷七）に「春風復有情、私幔且開楹（春風 復た情有り、幔を私ひ 且つ楹を開く）」とあるのは部屋窓の懸かるカーテンをいう。

「緑柳」葉が青々とした柳。謝靈運「從遊京口北固亭詠詩」（『文選』卷二十三）に「原隰萋緑柳、墟囿散紅桃（原隰 緑柳萋萋、墟囿 紅桃散ず）」と。

- 1 洛陽には広い道が通っており
- 2 街の北から街の西にまで伸びている
- 3 青々としたエンジュの葉が馬車のホロをかすめ
- 4 風に吹かれて揺れる緑の柳が低く垂れている
- 5 軍馬のくつわを飾る玉が涼やかな音で鳴り
- 6 雄鶏が關鶏場で金属を被せた蹴爪を戦わせている
- 7 やがて日が暮れようとする頃、桑の葉がしばみ
- 8 桑摘みから帰る秦羅敷のような美しい女性たちに行き合う

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十二、『古詩紀』卷八十、『漢魏六朝百三家集』、『六朝詩集』

0 「洛陽道」、『類聚』作「洛陽道詩」。

8 「多逢」、底本原作「多途」。『六朝詩集』作「途多」。
「氏」、底本・『六朝詩集』并作「女」。底本注云『多途秦女妻』、拠『詩紀』改。

【押韻】

「西」「低」「鶏」「妻」、上平十二齊韻。

【作者】

五〇八く五五四。梁の第三代皇帝（在位五五二く五五四）。武帝（蕭衍）の第七子、昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱の異母弟。湘東王に封ぜられ、江陵に鎮して重きをなし、

「逐風」追われるかのように風に吹かれる。晋・陶淵明「雜詩」十二首其一に「分散逐風轉、此已非常身（分散して風に逐はれて転じ、此れ已に常の身に非ず）」と。元帝には「芳樹」に「落英逐風聚、輕香帶藥翻（落英 風を逐ひて聚まり、輕香 藥を帯びて翻る）」、「巫山高」に「灘声下澗石、猿鳴上逐風（灘声 下りて石に澗ぎ、猿鳴 上りて風を逐ふ）」、「綠柳」詩に「長条垂埒地、輕花上逐風（長条 垂れて地を埒ひ、輕花 上りて風を逐ふ）」、「賦得登山馬」詩に「汗赭疑沾勒、衣香不逐風（汗赭 勒を沾すかと疑ひ、衣香 風を逐はず）」とあるなど用例が多い。

5 玉珂鳴戰馬 6 金爪闘場鷄

「玉珂」身分の高い人が乗る馬のくつわを飾る玉。馬が走ると涼やかな音で鳴る。右に引いた何遜の「車中見新林分別甚盛」詩にも「鳴珂」の語が見えた。晋・張華「輕薄篇」に「文軒樹羽蓋、乘馬鳴玉珂（文軒に羽蓋樹ち、乘馬に玉珂鳴る）」とある。

「戰馬」戦鬪の訓練をした馬。六朝詩では北周・庾信「見征客始還遇獵」詩に「猶言乘戰馬、未得解戎衣（猶ほ言ふ 戰馬に乗ると、未だ戎衣を解くを得ず）」と見える。

「金爪」金属を被せた雄鶏の蹴爪。蹴爪はキジや鶏の足の後ろ側にある角質の突起。六朝詩では他の用例は見当たらない。金距とも。距も蹴爪のこと。『春秋左氏伝』

妾（好く城旁の人に値ひ、多く蕩舟の妾に逢ふ）」と。

「秦氏妻」秦羅敷をいう。ここは美しい女性の意。漢・無名氏「陌上桑」（『樂府詩集』卷二十八。『宋書』樂志作「艷歌羅敷行」。『玉台』卷一作「日出東南隅行」。）に「秦氏有好女、自名為羅敷。羅敷喜蚕桑、採桑城南隅（秦氏に好女有り、自ら名づけて羅敷と為す。羅敷

蚕桑を喜び、桑を城南の隅に採る）」とあるように養蚕のために桑の葉を摘む女性として描かれる。

梁・沈約「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|----|----------|
| 1 洛陽大道中 | 洛陽 | 大道の中 |
| 2 佳麗実無比 | 佳麗 | 実に比ひ無し |
| 3 燕裙傍日開 | 燕裙 | 日に傍ひて開き |
| 4 趙帶隨風靡 | 趙帶 | 風に隨ひて靡く |
| 5 領上蒲桃繡 | 領上 | 蒲桃の繡 |
| 6 腰中合歡綺 | 腰中 | 合歡の綺 |
| 7 佳人殊未來 | 佳人 | 殊に未だ來たらず |
| 8 薄暮空徙倚 | 薄暮 | 空しく徙倚す |

【日本語訳】

- 1 洛陽では広い道に
- 2 この上なく美しい女性たちが行き交います
- 3 燕の舞姫のスカートは日の光を受けて広がり
- 4 趙の歌姫の帯は風に吹かれてひるがえります

昭公二十五年に「季・邶之鷄闘。季氏介其鷄、邶氏為之金距。（季・邶の鷄 闘ふ。季氏は其の鷄に介し、邶氏は之れが金距を為る。）」とある。三国魏・応場「闘鷄」詩に「芥羽張金距、連戰何續紛（羽に芥ぬり 金を距に張り、連戦 何ぞ續紛たる）」と。

「闘場」ここは闘鷄場の意で解した。庾信「從駕觀講武」詩に「校戰出長楊、兵欄入闘場（校戰 長楊を出で、兵欄 闘場に入る）」とあるのは練兵場。曹植が洛陽を描いた「名都篇」（『文選』卷二十七）に「闘鷄東郊道、走馬長楸間（鷄を闘はす 東郊の道、馬を走らす 長楸の間）」と、遊侠の徒が好む娯楽のひとつとして闘鷄を挙げる。

7 桑萎日行暮 8 多逢秦氏妻

「桑萎」日が暮れて桑の葉がしぼんでしまう。沈約「三月三日率爾成篇」（『文選』卷三十）に「寧憶春蚕起、日暮桑欲萎（寧ぞ憶はん 春蚕 起き、日 暮れて桑の萎まんと欲するを）」とある。

「行暮」日が暮れようとする。「行」は将と同じく近い未来にある事態が起こることを表す。陸機「歎逝賦」（『文選』卷十六）に「世閔人而為世、人冉冉而行暮。（世は人を閔べて世を為し、人は冉冉として行ゆく暮れんとす。）」とある。

「多逢」しばしばめぐり逢う。梁簡文帝蕭綱「雍州曲」三首（『玉台』卷七）・北渚に「好值城旁人、多逢蕩舟

5 わたしは襟にブドウの刺繡をした服を身に着け

6 腰にはネムノキの模様のあるあや絹の帯をしています

7 なのに、あの人はやっぱり来てくれません

8 夕暮れの中、ムダにうろつき回るばかりです

【校勘】

○『古詩紀』卷八十二

5 「桃」、「詩紀」作「荷」。

【押韻】

「比」、上声五旨韻。「靡」「綺」「倚」、上声四紙韻。紙・旨同用。

【作者】

四四一〜五一三。字は休文、吳興郡武康（浙江省湖州市）の人。梁の文人、政治家。寒門出身だったが学問と文才によって重きをなし、宋・齊・梁の三代に仕えた。梁の武帝蕭衍即位の際にブレーンとして協力し、その後は尚書令、侍中を歴任した。

文壇でも第一人者となり、齊の時には竟陵王蕭子良に招かれてその文学サロンである「竟陵八友」の中心的役割を果たし、「四声八病説」を唱えて詩の音律の美しさを追求し、謝朓、王融らとともに永明体と呼ばれる詩風を開いた。「四声八病説」はあまりにも煩雑であったため、試みに終始してしまっただが、唐代の近体詩成立に寄与し

た。文章家としても知られ、『宋書』を著した。

【語釈】

1 洛陽大道中 2 佳麗実無比

「無比」他に比べるものがない。「古詩為焦仲卿妻作」〔玉台〕卷一に「可憐体無比、阿母為汝求（可憐 体 比ひ無く、阿母 汝の為に求めん）」と。また沈約「六憶詩」四首〔玉台〕卷五 其二に「笑時心無比、嗔時更可憐（笑ふ時は心に比ひ無かるべく、嗔る時は更に可憐）」とある。

3 燕裙傍日開 4 趙帶隨風靡

「燕裙」美しい舞姫のスカート。燕は今の河北省を中心とする地域。「古詩十九首」〔文選〕卷二十九 其十二に「燕趙多佳人、美者顏如玉（燕趙 佳人多く、美なる者 顔 玉の如し）」とあり、以降、北齊・蕭愨「秋思」詩に「燕幃細綺被、趙帶流黃裾（燕幃 細綺の被、趙帶 流黃の裾）」、沈約「八詠」詩・会圃臨春風〔玉台〕卷九に「開燕裾、吹趙帶。趙帶飛參差、燕裾合且離（燕裾を開き、趙帶を吹く。趙帶 飛びて参差として、燕裾 合して且つ離る）」、吳均「与柳惔相贈答」詩六首〔玉台〕卷六 其二「燕姬及趙女、挾瑟夜經過（燕姬 及び趙女、瑟を挟みて 夜 經過す）」とあるように燕出身の女性は美しい舞姫、歌姫を指すようになる。

「傍日開」日光を受けて広がる。「傍日」、六朝詩では他の用例は見当たらない。「傍」は寄り添う。「開」は梁・劉孝威「賦得鳴幃応令」詩に「転袖時繞腕、揚履自開裙（転袖 時に腕を繞り、揚履 自ら裙を開く）」とあるように裳裾が広がること。

「趙帶」美しい舞姫の腰帶。「趙」は今の山西省を中心とする地域。「燕裾」の【語釈】参照。

「隨風靡」風に吹かれて翻る。魏文帝曹丕「秋胡行二首」其二に「寄身流波、隨風靡傾（身を流波に寄せ、風に随ひて靡傾す）」と。

5 領上蒲桃繡 6 腰中合歡綺

「領上」えり。晋・陶淵明「閑情賦」に「願在衣而為領、承華首之余芳。（願はくは衣に在りては領と為り、華首の余芳を承けんことを。）」と。

「蒲桃繡」ブドウ模様の刺繡。ブドウは蒲陶、葡萄とも。『漢書』西域伝上・大宛国に「漢使采蒲陶・目宿種帰。（漢使 蒲陶・目宿の種を采りて帰る。）」と見え、梁・王僧孺「鼓瑟曲有所思」〔玉台〕卷六に「幾銷靡蕪葉、空落蒲桃花（幾たびか銷す 靡蕪の葉、空しく落つ 蒲桃の花）」、何思澄「南苑逢美人」詩〔玉台〕卷六に「風卷蒲萄帶、日照石榴裙（風は卷く 蒲萄の帶、日は照らす 石榴の裾）」と、子宝に恵まれる効果があるとされる「靡蕪」や小さな実がたくさんなるザクロと対になっている。

「腰中」腰のあたり。梁・武帝蕭衍「有所思」〔玉台〕卷七に「腰中双綺帶、夢為同心結（腰中 双綺帶、夢に同心の結を為す）」と。

「合歡綺」ネムノキ模様のあやぎぬ。夫婦和合を表す。

梁武帝「子夜四時歌・秋歌」四首〔玉台〕卷十に「繡帶合歡結、錦衣連理文（繡帶 合歡の結、錦衣 連理の文）」（「結」、原作「炬」。拠『樂府詩集』卷四十四作「結」而改。）と。

7 佳人殊未来 8 薄暮空徙倚

「佳人殊未来」あの人はまだ来てくれない。「殊」は「未」の前に置かれ、状態に変化がないことを表す。梁・江淹「雜体詩」〔文選〕卷三十一 休上人別怨〔玉台〕卷五作「怨別」。「日暮碧雲合、佳人殊未来（日暮 碧雲 合し、佳人 殊に未だ来たらず）」、梁武帝「雍台」「日落登雍台、佳人殊未来（日 落ちて 登雍台に登るも、佳人 殊に未だ来たらず）」と同一句がある。「徙倚」さまよう。どちらに向かつて進めばいいのかわからなくなっている状態。晷韻。『楚辞』遠遊に「步徙倚而遙思兮、招愉悅而乖懷。（歩みて徙倚として遙かに思ひ、招として愉悦として懷ひに乖く。）」とあり、王逸注に「彷徨東西、意愁憤也。（東西に彷徨し、意ひ愁憤するなり。）」とある。また、曹植「洛神賦」〔文選〕卷十九に「於是洛靈感焉、徙倚傍徨。（是に於いて洛靈 焉れに感じ、徙倚傍徨す。）」と。

梁・庾肩吾「洛陽道」

【本文及び書き下し】
1 微道臨河曲 微道 河曲に臨み
2 層城傍洛川 層城 洛川に傍ふ
3 金門纔出柳 金門 纔かに柳を出で
4 桐井半含泉 桐井 半ば泉を含む
5 日起眾憊外 日は起つ 眾憊の外
6 車回双闕前 車は回る 双闕の前
7 潘生時未返 潘生 時に未だ返らず
8 遙心徒眷然 心を遙かにして 徒らに眷然たらん

【日本語訳】

1 警邏のための道が黄河の曲がった辺りの眼の前にあり
2 幾重にも重なった都の建物が洛水のすぐそばにある
3 王宮の門は柳よりもかううじて高く
4 桐がそばに生えている井戸には半ばまで水が溜まって
いる
5 日が宮門の両脇にある望楼の上の塙の高さにまで昇り
6 望楼前には車が向きを変えられるほどの広さがある
7 潘岳はその時まで都に帰れずにいたから
8 赴任先で洛陽を思い、ムダに都の方を振り返ったこと
だろう

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷九十

2 「層城」、原作「曾城」、注云「拠『詩紀』改」。「洛」、
『英華』作「漢」、注云「一作『洛』」。

4 「桐」、『英華』作「銅」。

【押韻】

「川」「泉」「然」、下平二仙韻。「前」、下平一先韻。先・仙同用。

【作者】

四八七～五五一。字は子慎、新野の人。庾信の父。天監八（五〇九）年晋安王蕭綱の常侍となり、以後常に蕭綱の府にあつてその文学集団の主要人物のひとりとなった。太清二（五四八）年、侯景が建康を陥落させ、翌年簡文帝蕭綱を即位させた。庾肩吾は江州刺史であつた蕭繹の下に逃れたが、まもなく卒した。

庾肩吾は宮体詩の代表的な詩人であり、徐摛とともに徐庾体と称されたが、清・陳祚明『采菽堂古詩選』卷二十五に「調叶声諧、自然流暢」と評するように、特に声律の整つた詩を作った。

【語釈】

1 微道臨河曲 2 層城傍洛川

「微道」警邏のための道。班固「西都賦」『文選』卷一）に「周廬千列、微道綺錯」（周廬 千列し、微道 綺錯

寮を払ふ』と。層城は即ち増城なり。」という。

「洛川」川の名。洛水。曹植「洛神賦」序（『文選』卷十九）に「黄初三年、余朝京師、還濟洛川。（黄初三年、余 京師に朝し、還りて洛川を済る。）」とあり、李善注に「京師、洛陽也。洛川、洛水之川也。洛水出洛山。（京師は、洛陽なり。洛川は、洛水の川なり。洛水洛山より出づ。）」という。

3 金門纔出柳 4 桐井半含泉

「金門」漢代の宮門の名。金馬門。『史記』滑稽列伝に「金馬門者、宦者署門也。門傍有銅馬、故謂之曰金馬門。（金馬門は、宦者署の門なり。門の傍らに銅馬有り、故に之れを謂ひて金馬門と曰ふ。）」とある。略して「金門」とも。楊雄「解嘲」（『文選』卷四十五）に「今吾子幸得遭明盛之世、処不諱之朝、与群賢同行、歷金門、上玉堂有日矣。（今 吾子 幸ひに明盛の世に遭ひ、不諱の朝に処り、群賢と行を同じくし、金門を歴て、玉堂に上るを得ること日有り。）」とあるように、これも長安との結び付きの強い語だが、都城の宮門の意で用いるだろう。謝朓「郡内高齋閑坐答呂法曹」詩（『文選』卷二十六）に「若遺金門歩、見就玉山岑（若し金門の歩みを遺つれば、玉山の岑に就かれよ）」とある。

「纔出柳」柳の木よりもかろうじて高い。二句、読みにくいが「桐井」の方が水の深さをいうのに対して「金門」の高さをいうのではないかと考えた。沈約「詠新

す。」とあり、李善注は『漢書』百官公卿表上に「中尉、秦官、掌徼循京師。（中尉、秦官、京師を徼循するを掌る。）」とあるのを引く。「西都賦」は長安を描くが、ここは京師のイメージを用いた。

「河曲」黄河が湾曲して奥まったところ。魏文帝曹丕「与朝歌令吴质书」（『文選』卷四十二）「時駕而遊、北遵河曲、從者鳴笳以啓路、文学託乗於後車。（時に駕して遊び、北のかた河曲に遵ひ、從者は笳を鳴らして以て路を啓き、文学は後車に託乗す。）」と見える。陸機「擬東城一何高」（『文選』卷三十）「思為河曲鳥、双游豐水湄（思ふ 河曲の鳥と為り、豐水の湄に双び遊ぶん）」のように、多く長安と結び付けられるが、これも京師のイメージを用いたのだろう。陸機には「贈武昌太守夏少明」詩六章其一に「西瞻崤岡、北臨河曲（西のかた崤岡を瞻え、北のかた河曲に臨む）」との用例もある。

「層城」都、また都の建物。陸機「贈尚書郎顧彦先」二首（『文選』卷二十四）其二「朝遊遊層城、夕息旋直廬（朝に遊ぼんとして層城に遊び、夕べに息はんととして直廬に旋る）」と。楊明校箋『陸機集校箋』（上海古籍出版社 二〇一六）には「層城、疑是晋宮城内樓觀名、在南宮太極殿左近。潘尼『桑樹賦』、『倚増城之飛觀、弘綺窓之疏寮。』層城即増城。（層城、疑ふらくは是れ晋の宮城内の樓觀の名ならん、南宮太極殿の左近に在り。潘尼『桑樹賦』に、『増城の飛觀に倚り、綺窓の疏

荷応詔」詩に「微根纔出浪、短幹未揺風（微根 纔かに浪を出で、短幹 未だ風に揺れず）」と。

「桐井」桐の木が側に植えられた井戸。魏・明帝曹叡「猛虎行」に「双桐生空井、枝葉自相加（双桐 空井に生じ、枝葉 自ら相ひ加ふ）」とあるなど、井戸の近くに桐が生えているという描写は六朝詩にもしばしば見られるが、「桐井」の語はあまり用いられない。

「半含泉」井戸の半ばまで湧き水が溜まっている。「空井」は水が涸れた井戸であるのに対していうのだろう。

5 日起眾慰外 6 車回双闕前

「日起」日が昇る。謝朓「從戎曲」に「日起霜戈照、風廻連翻（日 起ちて 霜戈 照らされ、風 廻りて連旗 翻る）」とある。

「眾慰」宮門の両脇にある望楼の上の格子状の扉。『漢書』文帝紀に「未央宮東闕眾慰災。（未央宮の東闕の眾慰災あり。）」と見え、顔師古注に「眾慰、謂連闕曲閣也。以覆重刻垣墉之处、其形眾慰然、一曰屏也。（眾慰、連闕曲閣を謂ふなり。以て重刻の垣墉の处を覆ひ、其の形 眾慰然、一に屏と曰ふなり。）」という。梁・王僧孺「贈顧倉曹」詩に「洛陽十二門、樓闕似西崑。曖曖眾慰下、相望隔画垣（洛陽十二門、樓闕 西崑に似る。曖曖 眾慰の下、相ひ望むも 画垣に隔てらるる）」とあり、洛陽との繋がりが描かれる。

「車回」馬車が向きを変える。ここは宮門の前の道が馬

車が向きを変えることができるほど広いことをいう。
「車回」、六朝詩には他の用例は見当たらないが、「古詩十九首」其十一に「迴車駕言邁、悠悠涉長道（車を廻らして 駕して言に邁き、悠悠として長道を渉る）」と「迴車」の例がある。

「双闕」宮門の兩脇にあった左右一対の高い建物を「双闕」といい、その上に高い檐や扉があるものを「連闕」という。「古詩十九首」其三に「洛中何鬱鬱、冠帶自相索。長衢羅夾巷、王侯多第宅。兩宮遙相望、双闕百余尺（洛中 何ぞ鬱鬱たる、冠帶 自ら相ひ索む。長衢 夾巷を羅ね、王侯 第宅多し。兩宮 遙かに相ひ望み、双闕 百余尺）」と洛陽の情景として現れる。

7 潘生時未返 8 遙心徒眷然

「潘生」潘岳を指す。「生」は読書人の通称に用いる接尾辞。梁・劉孝綽「秋雨臥疾」詩に「賈君徭役少、潘生民務稀（賈君 徭役 少なく、潘生 民務 稀なり）」とあるが、「民務」の語は潘岳「在懷鼎作」二首（『文選』卷二十六）其二に「小国寡民務、終日寂無事（小国に民務寡なく、終日 寂として事無し）」とあるのに基づく。

「時未返」地方官に出されたまま都に帰って来ない。潘岳は任官が思うに任せず、地方官を歴任することになり、「河陽鼎作」二首、「在懷鼎作」二首といった赴任先で作った詩が『文選』卷二十六に収められている。

5王の子孫たちは外出して遊ぶことを重んじ
6諸侯の子弟たちは連れ立って遊ぶのを好む
7そんな昼間の洛陽とは別に人をダメにする場所がある
8それは夜な夜な美しい女性たちとめぐり逢うところ

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十二。『古詩紀』卷百三
異同無

【押韻】

「重」「蓉」「從」「逢」、上平三鍾韻。

【作者】

未詳。『先秦漢魏晉南北朝詩』には四首を収めるが、いずれも樂府である。

【語釈】

1 洛陽道八達 2 洛陽城九重

「道八達」道路が四方八方に通じている。『爾雅』釈宮に「一達謂之道路、二、八達謂之崇期。（一達 之れを道路と謂ひ、二、八達 之れを崇期と謂ふ。）」とあり、郭璞注に「四道交出。（四道 交ごも出づ。）」とある。陳後主「洛陽道」五首其三にも「縱橫肆八達、左右闢康莊（縱橫 八達を肆にし、左右 康莊を闢く）」と見える。

「遙心」遠くを思う。宋・謝惠連「七月七日夜詠牛女」詩（『文選』卷三十。『玉台』卷三）に「留情顧華寢、遙心逐奔龍（情を留めて 華寢を顧み、心を遙かにして奔龍を逐ふ）」とある。
「眷然」心惹かれて振り返る様。（こは潘岳「在懷鼎作」二首其二に「眷然顧羣洛、山川邈離異（眷然として羣洛を顧みれば、山川 邈かにして離異たり）」（「卷」、本集作「眷」）とあるのに基づく。

梁・車轂「洛陽道」

【本文及び書き下し】

- 1 洛陽道八達 洛陽 道は八達
- 2 洛陽城九重 洛陽 城は九重
- 3 重関如隠起 重関 隠起の如く
- 4 双闕似芙蓉 双闕 芙蓉に似る
- 5 王孫重行楽 王孫 行楽を重んじ
- 6 公子好遊従 公子 好んで遊従す
- 7 別有傾人処 別に人を傾くの処有り
- 8 佳麗夜相逢 佳麗 夜に相ひ逢ふ

【日本語訳】

- 1 洛陽は道が四方八方に通じて
- 2 洛陽は門が九重の天子の住居
- 3 その門の二重のカンヌキは浮き彫りのよう
- 4 門の兩脇の望楼はすくくと立つハスの花に似る

「城九重」天子の住居。古くは天子の住居は門が九重だったことから。『楚辭』九弁に「豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重（豈に鬱陶として君を思はざらんや、君の門は以て九重なり）」と。

3 重関如隠起 4 双闕似芙蓉

「重関」二重になったカンヌキ。曹植「美女篇」（『文選』卷二十七）に「青樓臨大路、高門結重関（青樓 大路に臨み、高門 重関を結ぶ）」と。

「隠起」浮き彫り。『西京雜記』卷五に「趙后有宝琴、曰鳳凰、皆以金玉隠起為龍鳳鸞鸞・古賢列女之象。（趙后に宝琴有り、鳳凰と曰ひ、皆な金玉隠起を以て龍鳳鸞鸞・古賢列女の象を為す。）」とある。

「双闕」庾肩吾「洛陽道」第6句「車回双闕前」【語釈】参照。

「似芙蓉」水面から真つ直ぐ伸びるハスの花のよう。

5 王孫重行楽 6 公子好遊従

「王孫」「公子」王侯貴族の子弟。簡文帝蕭綱「洛陽道」第3句「遊童時挾彈」の【語釈】にも引いた『戦国策』楚策に「不知夫公子王孫、左挾彈、右捩丸、将加乎己十仞之上、以其類為招。（知らず 夫の公子王孫の、左に彈を挟み、右に丸を捩り、将に己に十仞の上を加へ、其の類を以て招と為さんとするを。）」とあった。

「行楽」外出して遊ぶこと。漢・楊惲「報孫会宗書」（『文

選』卷四十一)に「人生行樂耳、須富貴何時。(人生は行樂せんのみ、富貴を須つも何れの時ぞ。)」とある。「(重く、く好く)鮑照「擬古」詩八首其二『文選』卷三十一)に「幽并重騎射、少年好馳逐(幽并 騎射を重んじ、少年 好んで馳逐す)」とあるのを意識するのではないかと思う。

〔遊従〕連れ立って出掛ける。「游従」に同じ。陶淵明「与殷晋安别」詩に「負杖肆游従、淹留忘宵晨(杖を負ひて 游従を肆にし、淹留して 宵晨を忘る)」と。

7 別有傾人处 8 佳麗夜相逢

〔別有〕これとは別にゝがある。謝朓「秋竹曲」に「欲求簑下吹、別有江南枝(簑下の吹を求めんと欲すれば、別に江南の枝有り)」と。

〔傾人处〕人をダメにする場所。漢・李延年「歌」に「北方有佳人、絶世而独立。一顧傾人城、再顧傾人国(北方に佳人有り、絶世にして独り立つ。一顧すれば人の城を傾け、再顧すれば人の国を傾く)」とあるのに拠る。

〔佳麗〕美しい女性。簡文帝蕭綱「洛陽道」第1句「洛陽佳麗所」【語釈】参照。

〔相逢〕めぐり逢う。謝朓「和王主簿怨情」詩『文選』卷三十)に「相逢詠麋蕪、辭寵悲班扇(相ひ逢ひては麋蕪を詠じ、寵を辞しては班扇を悲しむ)」と見える。

陳・後主「洛陽道」五首其一

○『古詩紀』卷百八

2 「遨遊」底本注云「一作『遊遊』」。

3 「嫩」底本原作「嬾」、拠『詩紀』改「嫩」。

【押韻】

「京」「生」「迎」、下平十二庚韻。「覺」、下平十三耕韻。

「名」、下平十四清韻。庚・耕・清同用。

【作者】

五五三〜六〇四。字は元秀、吳興長城(浙江省湖州市)の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四(五八二)年、即位。禎明三(五八九)年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。

亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が楽府である。

【語釈】

1 誼譚照邑里 2 遨遊出洛京

〔誼譚〕喧しいほど賑やかな様。喧嘩に同じ。双声。晋・左思「吳都賦」(『文選』卷五)に「誼譚皤皤、芬葩蔭映。(誼譚 皤皤し、芬葩 蔭映す。)」と見える。

〔照邑里〕「邑里」は村里。ここは洛陽に出て来た若者の

【本文及び書き下し】

- 1 誼譚照邑里 誼譚 邑里を照らし
- 2 遨遊出洛京 遨遊して 洛京に出づ
- 3 霜枝嫩柳発 霜枝 嫩柳 発し
- 4 水塹薄苔生 水塹 薄苔 生ず
- 5 停鞭回去影 鞭を停めて 去影 回らせ
- 6 駐軸敝前薨 軸を駐めれば 前薨 敝く
- 7 台上経相識 台上に経て相ひ識り
- 8 城下屢逢迎 城下に屢しば逢迎す
- 9 踟躕還借問 踟躕して還た借問すれば
- 10 只重未知名 只だ未だ名を知られざるを重んずと

【日本語訳】

- 1 洛陽の喧噪が田舎にまで届くので
- 2 若者は家を離れて花の都洛陽に出て来た
- 3 ちようど霜を載せたしなやかな柳の枝が伸びはじめ
- 4 お堀の水辺にうつすらと苔が生えている頃のこと
- 5 馬を留めると、歩き去る美しい女性が振り返り
- 6 車を止めると、前の方に大きな瓦屋根の建物が見えた
- 7 洛陽のあの建物で顔見知りになり
- 8 洛陽の街でしばしば出迎えてくれた
- 9 立ち去りかねて訊ねてみると
- 10 まだ世に出ていない若者を大切に思えばかりなのだ

【校勘】

出身地。謝朓「始出尚書省」(『文選』卷三十)に「邑里向疎蕪、寒流自清泚(邑里 疎蕪に 向とし、寒流 自ら清泚)」とある。「照」は読みにくいが、洛陽の賑やかな様が村里の隅々にまで届いたことをいうのだと解した。

〔遨遊〕遊び楽しむ。また、故郷を離れて遊歴する。魏文帝曹丕「芙蓉池作」詩『文選』卷二十二)に「遨遊快心意、保己終百年(遨遊して心意を快くし、己を保ちて百年を終へん)」と見える。

〔洛京〕洛陽のこと。六朝詩では余り用いられない。『晋書』王浚伝に「使者未及発、会洛京傾覆、浚大樹威令。(使者 未だ発するに及ばざるに、会たま洛京 傾覆し、浚 大いに威令を樹つ。)」とある。

3 霜枝嫩柳発 4 水塹薄苔生

〔霜枝〕霜を被った枝。梁・范雲「贈俊公道人」詩に「風条振風響、霜葉断霜枝(風条 風響を振るひ、霜葉 霜枝を断つ)」と。

〔嫩柳発〕柳が若くしなやかな枝を伸ばし始める。陳・江総「怨詩」二首其二に「新梅嫩柳未障羞、情去恩移那可留(新梅嫩柳 未だ羞づるを障らず、情 去り 恩 移れば 那ぞ留むべけん)」とあり、梁・簡文帝蕭綱「春日」詩に「桃含可憐紫、柳発断腸青(桃は含む 可憐の紫、柳は発す 断腸の青)」とある。

〔水塹〕堀。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「薄苔生」苔がうつすらと生えている。「薄苔」、やはり六朝詩には他の用例は見当たらない。沈約「冬節後至丞相第詣世子車中」(『文選』卷三十)に「賓階緑錢滿、客位紫苔生(賓階 緑錢 滿ち、客位 紫苔 生ず)」とあり、李善注は崔豹『古今注』下に「空室無人行、則生苔蘚、或青或紫、一名緑錢。(空室 人の行く無ければ、則ち苔蘚を生じ、或いは青 或いは紫、一に緑錢と名づく。)」とあるのを引く。

5 停鞭回去影 6 駐軸敵前薨

「停鞭」馬の歩みを止める。六朝詩では他の用例は見当たらない。六朝詩中の「鞭」はほとんどの場合「挙鞭」「揚鞭」「抽鞭」「鳴鞭」の形で現れる。

「回去影」向こうへ歩いて行く美しい女性の姿が振り返る。読みにくいのが、「回」は向きを変える、振り返る。

「去影」は立ち去るものの姿、の意で解した。庾肩吾「送別於建興苑相逢」詩(『玉台』卷八)に「去影背斜日、香衣臨上風(去影 斜日に背き、香衣 上風に臨む)」と。

「駐軸」馬車を停める。これも六朝詩では他の用例は見当たらない。

「敵前薨」前の方に立派な建物が見えてくる。こちらでも読みにくい。「敵」は開ける、広がる。陶淵明「桃花源記詩」に「奇蹤隱五百、一朝敵神界(奇蹤 隠れしより五百、一朝 神界敵く)」「前薨」も六朝詩では他の用

例は見当たらない。前方の瓦葺きの建物の意で解した。

7 台上經相識 8 城下屢逢迎

「台上」楼台。高い建物。例えば陸機「日出東南隅行」(『文選』卷二十八。「玉台」卷三作「艷歌行」)に「高台多妖麗、瀋房出清顔(高台に妖麗多く、瀋房 清顔を出だす)」「瀋」「玉台」作「洞」とあるように、しばしば美しい女性の居場所として描かれる。

「経く、屢く」もう既にしており、しばしばした。陳・周弘正「和庾肩吾入道館」詩に「桃花経作実、海水屢成田(桃花 経に実を作し、海水 屢しば田を成す)」とある。

「相識」顔見知りになる。梁・簡文帝蕭綱「從頓還城南」詩(『玉台』卷十作「夜夜曲」)「都如未有情、更似新相識(都て未だ情有らざるが如く、更に新相識に似る)」「(如)、本集作「知」」とある。

「逢迎」出迎える。陳・張正見「採桑」に「人多羞借問、年少怯逢迎(人多くして 借問するを羞ぢ、年少 逢迎するを怯る)」と。

9 脚躑還借問 10 只重未知名

「脚躑」立ち去りかねてうろろうろする様。「脚躑」「脚躑」とも。双声。漢・辛延年「羽林郎」詩(『玉台』卷一)「銀鞍何昱爚、翠蓋空脚躑(銀鞍 何ぞ昱爚たる、翠蓋 空しく脚躑す)」と見える。

「借問」質問をする。詩では多く句頭に用い、他人への

問い掛けを表したり、自問自答を導く。句末に用いる例では庾信「見征客始還遇獵」詩に「故人迎借問、念旧始依依(故人 迎へて借問すれば、旧を念ひて 始めて依依たり)」と。

「只重」くだけを重ねる。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「未知名」まだ世に名を知られていない若者。ここは第1・2句で描かれた村里から洛陽に出て来たばかりの若者を指すのだろう。『晋書』王述伝に「年三十、尚未知名、人或謂之癡。(年 三十、尚ほ未だ名を知られず、人 或いは之れを癡と謂ふ。)」と。

陳・後主「洛陽道」五首其二

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|---------------|
| 1 日光朝杲杲 | 日光 朝に杲杲として |
| 2 照耀東京道 | 照耀す 東京の道 |
| 3 霧帯城樓開 | 霧は城樓を帯びて開け |
| 4 啼侵曙色早 | 啼きこえは曙色を侵して早し |
| 5 佳麗嬌南陌 | 佳麗 南陌に嬌として |
| 6 香氣含風好 | 香氣 風の好きを含む |
| 7 自憐釵上纓 | 自ら釵上の纓を憐むも |
| 8 不歎河辺草 | 河辺の草を歎かず |

【日本語訳】

○『古詩紀』卷百八
異同無し

【校勘】

○『古詩紀』卷百八

【押韻】

「杲」「道」「早」「好」「草」、上声三十二皓韻。

【語釈】

1 日光朝杲杲 2 照耀東京道

「日光」太陽の光。魏・劉楨「贈徐幹」詩に(『文選』卷二十三)「仰視白日光、瞰瞰高且懸(仰ぎては白日の光を視れば、瞰瞰として 高く且つ懸かなり)」と。

「杲杲」日が明るく輝く様。『詩經』衛風・伯兮に「其雨其雨、杲杲出日(其れ雨ふらん 其れ雨ふらん、杲杲

として出づる日あり」とある。

「照耀」光り輝く。「照耀」「照耀」とも。晝韻。謝靈運「七里瀨」〔『文選』卷二十六〕に「石淺水潺湲、日落山照耀（石 浅くして 水 潺湲たり、日 落ちて 山 照耀す）」とあり、李善注は『詩経』檜風・羔裘「羔裘如膏、日出有曜（羔裘 膏の如し、日 出でて曜たる有り）」と、毛伝の「日出照耀、然後見其如膏也。（日出でて照耀し、然る後に其の膏の如きを見るなり。）」を引く。

「東京道」「東京」は洛陽のことであるから、「洛陽道」のこと。

3 霧帯城楼開 4 啼侵曙色早

「霧帯城楼開」城門の望楼の辺りに立ち籠めていた朝靄が晴れる。「霧帯」、六朝詩には他の用例は見当たらない。「帯」は連なる。「城楼」は呉均「与柳惲相贈答」詩六首〔『玉台』卷六〕其四に「白日隱城楼、勁風掃寒木（白日 城楼に隠れ、勁風 寒木を掃ふ）」と見える。「開」、ここは霧が晴れること。謝朓「高齋視事」詩に「余雪映青山、寒霧開白日（余雪 青山に映じ、寒霧 白日に開く）」とあり、梁・丘遲「旦發漁浦潭」〔『文選』卷二十七〕に「漁潭霧未開、赤亭風已颺（漁潭 霧 未だ開けざるも、赤亭 風 已に颺ぐ）」とある。「啼侵曙色早」鳥の鳴き声が払曉の空の中、心ならずも早々に聞こえて来た。「啼侵」、六朝詩には他の用例は

見当たらない。「侵」は無理矢理に入り込む。「曙色」は明け方の空。梁・簡文帝蕭綱「守東平中華門開」詩に「薄雲初啓雨、曙色始成霞（薄雲 初めて雨を啓き、曙色 始めて霞と成る）」と。「早」は鳥の鳴き声が思ったよりも早く聞こえて来たこと。このような表現からすれば、きぬぎぬなのだろう。川合康三氏「中国のアルバーあるいは楽府『烏夜啼』について」（『東北大学文学部研究年報』五〇号 一九八六。後『中国のアルバー系譜の詩学』二〇〇三 汲古書院）に詳しい。

5 佳麗嬌南陌 6 香氣含風好

「佳麗」美しい女性。簡文帝「洛陽道」第1句「洛陽佳麗所」【語釈】参照。

「南陌」南側の道。沈約「臨高台」に「所思竟何在、洛陽南陌頭（思ふ所は竟に何くにか在る、洛陽 南陌の頭）」とあり、梁・武帝蕭衍「河中之水歌」〔『玉台』卷九作「無名氏」〕に「河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁。莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭（河中之水 東に向かひて流れ、洛陽の女兒 莫愁と名づく。莫愁 十三にして能く綺を織り、十四にして桑を南陌の頭に采る）」とあるように、莫愁のような若く美しい女性が桑と採るところとして設定される。

「香氣」よい香り。ここは女性のいい匂い。簡文帝「東飛伯勞歌」二首其二「網戸珠綴曲瓊鉤、芳茵翠被香氣流（網戸 珠綴、曲瓊の鉤、芳茵 翠被 香氣 流る）」

と。

「含風好」心地よい風に運ばれる。「風好」は押韻のために顛倒したものと解した。梁・虞羲「見江辺竹」詩に「含風自颺颺、負雪亦猗猗（風を含んで自ら颺颺、雪を負ひて亦た猗猗たり）」とある。「好風」の語は陶淵明「讀山海經」詩〔『文選』卷三十〕に「微雨從東來、好風与之俱（微雨 東より来たり、好風 之れと共にす）」と見え、梁・劉遵「繁華応令」詩〔『玉台』卷八〕にも「腕動飄香麝、衣輕任好風（腕 動きて 香麝 飄り、衣 軽くして 好風に任す）」と。

7 自憐釵上纓 8 不歎河辺草

「自憐」自分で自分を愛おしく思う。曹丕「寡婦」詩に「徒引領兮入房、竊自憐兮孤棲（徒らに領を引きて房に入り、竊かに自ら孤棲を憐れむ）」とあり、また梁・陸罩「閨怨」詩に「自憐斷帶日、偏恨分釵時（自ら憐む 帶を断つの日、偏へに恨む 釵を分かつの時）」と。

「釵上纓」女性の簪に引つ掛けた男性の冠のひも。女性の方から男性を誘うこと。宋玉「諷賦」に「以其翡翠之釵、挂臣冠纓（其の翡翠の釵を以て、臣の冠纓に挂く。）」とあり、司馬相如「美人賦」にも「臣之東隣、有一女子。…玉釵挂臣冠、羅袖扞臣衣。（臣の東隣に、一女子有り。…玉釵 臣の冠に掛け、羅袖 臣の衣を扞ふ。）」とあるのに拠る。また、謝朓「夜聽妓」詩

二首〔『玉台』卷四〕其二「掛釵報纓絶、墮珥答琴心（掛釵 纓の絶ゆるに報い、墮珥 琴心に答ふ）」とある。「不歎」嘆くには及ばない。曹丕「燕歌行」二首其二〔『玉台』卷九〕「涕零雨面毀容顔、誰能懷憂獨不歎（涕 零ちて 面に雨ふり 容顔を毀つ、誰か能く憂ひを懷きて 独り歎かざらん）」と。

「河辺草」川岸に生えた草。旅に出たままなかなか帰って来ない男を思い慕う女性を表す。「飲馬長城窟行」古辞〔『文選』卷二十七〕に「青青河辺草、綿綿思遠道（青青たる河辺の草、綿綿として遠道を思ふ）」とあり、「古詩十九首」其二にも「青青河畔草、鬱鬱園中柳。…蕩子行不歸、空牀難獨守（青青たり 河畔の草、鬱鬱たり 園中の柳。…蕩子 行きて帰らず、空牀 独り守り難し）」と。

陳・後主「洛陽道」五首其三

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|------------|
| 1 建都開洛汭 | 都を建てて 洛汭開け |
| 2 中地乃城陽 | 中地は乃ち城陽 |
| 3 縦横肆八達 | 縦横 八達を肆べ |
| 4 左右關康莊 | 左右 康莊を闢く |
| 5 銅溝飛柳絮 | 銅溝 柳絮飛び |
| 6 金谷落花光 | 金谷 花光落つ |
| 7 忘情伊水側 | 情を忘る 伊水の側 |
| 8 稅駕河橋傍 | 駕を稅く 河橋の傍 |

【日本語訳】

- 1 都を洛水の北に定めて土地を開いた
- 2 中央の地こそは洛陽城の南
- 3 南北に四方に通じる道を延ばし
- 4 東西に大きな道を開いた
- 5 洛陽城の西にある金谷園の周囲を流れる立派な水路にはヤナギの綿が風に舞い
- 6 金谷園ではその昔、美しい花が落ちたことがあった
- 7 南を流れる伊水の側で王子喬が仙人になって俗世の情を忘れ
- 8 東の河橋のそばに車を停めて別れを惜しむ人がいたこともある

【校勘】

○『古詩紀』卷百八
異同無し

【押韻】

「陽」「莊」、下平十陽韻「光」「傍」、下平十一唐韻。陽・唐同用。

【語釈】

1 建都開洛汭 2 中地乃城陽

「建都」都を定め建設する。班固「東都賦」(『文選』卷

一)に「立号高邑，建都河洛。」とあり、李善注は『東觀漢記』光武帝紀に「建武元年十月、車駕入洛陽、遂定都焉。(建武元年十月、車駕 洛陽に入り、遂に都を焉に定む。)」とあるのを引くが、現行の『東觀漢記』は「(建武元年)冬十月、帝入雒陽、幸南宮、遂定都焉。(冬十月、帝 雒陽に入り、南宮に幸し、遂に都を焉に定む。)」に作る。詩では沈約「和陸慧暉百姓名」詩に「建都望淮海、樹闕表衡稽(都を建てて淮海を望み、闕を樹てて衡稽を表す)」と。

「洛汭」洛水が黄河に合流するところ。『尚書』禹貢に「東過洛汭、至于大伾。(東して洛汭を過ぎ、大伾に至る。)」と見え、孔安国伝に「洛汭、洛入河处。(洛汭、洛の河に入る处なり。)」とある。「汭」は川の合流点。また川の北側を「汭」という。洛陽が洛水の北側であることに由来する地名なので、ここは「洛陽」の意で用いたのかもしれない。

「中地」中央の地だろう。この意味での用例は六朝詩には見当たらない。

「城陽」直接的には洛陽城の南側という意味だろうが、「洛陽」を「洛汭」と「城陽」とに分けて表現したのではないかと解した。

3 縦横肆八達 4 左右關康莊

「縦横」南北と東西、四方を指す。

「肆八達」道路が四方八方に通じている。「肆」は広げる。

『詩經』大雅・行葦に「或肆之筵、或授之几」とあり、毛伝に「肆、陳也。」とある。「八達」は車轂「洛陽道」にも「洛陽道八達、洛陽城九重(洛陽 道は八達、洛陽 城は九重)」と見えた。

「關康莊」広い道路が四方八方に通じている。「關」はひらく。「康莊」は四方八方に通じる大きな道。『史記』孟子荀卿列伝に「自如淳于髡以下、皆命曰列大夫、為開第康莊之衢。(淳于髡の如きより以下、皆な命じて列大夫と曰ひ、為に第を康莊の衢に開く。)」とあり、『集解』は『爾雅』釋宮に「四達謂之衢、五達謂之康、六達謂之莊。(四達 之れを衢と謂ひ、五達 之れを康と謂ひ、六達 之れを莊と謂ふ。)」とあるのを引く。詩では梁・劉孝威「行還值雨又為清道所駐」詩に「喧呼驚里閭、叫咷駭康莊(喧呼して里閭を驚かせ、叫咷して康莊を駭かす)」と。

5 銅溝飛柳絮 6 金谷落花光

「銅溝」銅で鑄造した水路。梁・任昉『述異記』に「吳王於宮中作海靈館・館娃閣、銅溝玉檻、宮之楹檻珠玉飾之。(吳王 宮中に於いて海靈館・館娃閣を作り、銅溝玉檻、宮の楹檻 珠玉もて之れを飾る。)」と見え、簡文帝「和武帝宴」詩二首其一に「銀塘瀉清渭、銅溝引直漪(銀塘 清渭に瀉ぎ、銅溝 直漪を引く)」とある。ここは字句の「金谷」を避け、「金溝」の意で用いたと解した。梁・徐悱「古意酬到長史溉登琅邪城」

詩(『文選』卷二十二)に「金溝朝灞澹、甬道入鴛鴦(金溝 灞澹に朝ぎ、甬道 鴛鴦に入る)」とあり、李善注は戴延之『西征記』を引いて「御溝引金谷水、從閭闔門入。(御溝 金谷の水を引き、閭闔門より入る。)」とする。恐らくは金谷園周辺の水路をいうのだろう。洛陽城中の立派な水路のこと。陳後主「洛陽道」五首其五にも「青槐夾馳道、綠水映銅溝(青槐馳道を夾み、緑水 銅溝に映ず)」と。

「飛柳絮」ヤナギの綿が風に吹かれて飛んでいく。徐陵「長相思」二首其二に「柳絮飛還聚、遊糸斷復結(柳絮 飛びて還た聚まり、遊糸 断ちて復た結ぶ)」と。

「金谷」金谷園。『中国史跡事典』(植木久行編 研文出版 二〇一五)に「西晋の富裕な貴族・石崇(字は季倫)の広大な莊園の名。当時の都洛陽城の西北郊外、金水(洛陽市孟津県の東南)の西南から流れて、莫家溝村を通り、劉坡村で東流して邙山(今河南省開封市)の流れる金谷澗ぞいの景勝地にあつた。」とある。

「落花光」花が散る。「花光」は花の鮮やかな色。簡文帝「和湘東王三韻詩二首」(『玉台』卷七)冬晚「帳裏竹葉帶、鏡裏菱花光(帳は褰ぐ 竹葉の帯、鏡は転ず菱花の光)」とあり、陳後主「梅花落」五首其一にも「映日光動、迎風香氣來(日に映じて 花光 動き、風を迎へて 香氣 来たる)」と。或いは石崇の愛妾である緑珠のイメージを重ねるか。『晋書』石崇伝に「時趙王倫專權、崇甥歐陽建与倫有隙。崇有妓曰緑珠、美而

艶、善吹笛。孫秀使人求之。崇時在金谷別館、方登涼台、臨清流、婦人侍側。使者以告、…、崇竟不許。秀怒、乃勸倫誅崇・建。崇・建亦潛知其計、乃与黃門郎潘岳陰勸淮南王允・齊王冏以凶倫・秀。秀覺之、遂矯詔收崇及潘岳・歐陽建等。崇正宴於楼上、介士到門。崇謂綠珠曰、『我今為爾得罪』。綠珠泣曰、『当效死於官前』。因自投于楼下而死。（時に趙王倫 權を専らにし、崇の甥 歐陽建 倫と隙有り。崇 妓有りて綠珠と曰ひ、美にして艶、善く笛を吹く。孫秀 人をして之れを求めしむ。崇 時に金谷の別館に在りて、方に涼台上に登り、清流に臨み、婦人 側らに待す。使者以て告ぐるも、…、崇 竟に許さず。秀 怒り、乃ち倫に崇・建を誅せんことを勸む。崇・建も亦た潜かに其の計を知り、乃ち黃門郎潘岳と陰かに淮南王允・齊王冏に勧めて以て倫・秀を図らんとす。秀 之れを覺り、遂に詔を矯りて崇及び潘岳・歐陽建等を収む。崇 正に楼上に宴するに、介士 門に到る。崇 綠珠に謂ひて曰く、『我 今 爾の為に罪を得たり』と。綠珠泣きて曰く、『当に死を官前に效すべし』と。因りて自ら楼下に投じて死せり。』とある。

7 忘情伊水側 8 税駕河橋傍

「忘情」喜怒哀樂の情がなくなる。『世說新語』傷逝に「聖人忘情、最下不及情、情之所鍾、正在我輩。（聖人は情を忘れ、最下は情に及ばず、情の鍾まる所は、正に我

が輩に在り。）」と見え、沈約「三月三日率爾成篇」（『文選』卷三十）に「且当忘情去、歎息独何為（且く當に情を忘れ去るべし、歎息 独り何をか為さん）」とある。ここは、俗世の情を離れることをいう。

「伊水」伊河。洛陽城の南を東流し、東で洛水に合流する。徐陵「新亭送別庾令」詩に「鳳吹して伊水に臨み、時に駕して河梁を出づ」（『鳳』、『英華』二六六作「風」）とあるのは次に引く王子喬の故事に拠る。齊・陸厥「奉答內兄希叔」詩五章（『文選』卷二十六）其三に「平旦上林苑、日入伊水浜（平旦 上林の苑、日は入る 伊水の浜）」とあり、李善注は『列仙伝』に「王子喬、周靈王太子晋也。好吹笙、作鳳凰鳴、遊伊・雒之間。（王子喬は、周の靈王の太子晋なり。好んで笙を吹き、鳳凰の鳴を作し、伊・雒の間に遊ぶ。）」とあるのを引く。「税駕」車を停める。また榮華を求めることをやめる。陸機「招隱」詩（『文選』卷二十二）に「富貴苟難圖、税駕從所欲（富貴 苟に図り難く、駕を税きて欲する所に從はん）」とあり、李善注は「駕と税くとは、榮を辞すに喩ふるなり。」とし、『史記』李斯列伝に「李斯曰、『當今人臣之位、無居臣上者、可謂富貴極矣。吾未知所税駕也』（李斯 曰く、『當今 人臣の位、臣の上に居る者無く、富貴 極まると謂ふべし。吾 未だ駕を税く所を知らざるなり』と。）」とあるのを引く。

「河橋」晋の杜預が黃河に架けた橋の名。河南省孟県の西南、孟津県の東北にあった。漢魏の洛陽城から見て

東北に当たる。徐陵「洛陽道」二首其二にも「濯龍望如霧、河橋渡似雷（濯龍 望めば霧の如く、河橋 渡れば雷に似る）」とある。ここは右に引いた徐陵「新亭送別庾令」詩に見える「河梁」の意で用いたとも考えられる。漢・李陵「与蘇武」詩三首（『文選』卷二十九）其三に「携手上河梁、遊子暮何之（手を携へて河梁に上る、遊子 暮に何くにか之く）」と見え、送別の地として描かれる。

陳・後主「洛陽道」五首其四

【本文及び書き下し】

1 百尺瞰金埒	百尺	金埒を瞰
2 九衢通玉堂	九衢	玉堂に通ず
3 柳花塵裏暗	柳花	塵裏に暗く
4 槐色露中光	槐色	露中に光る
5 遊俠幽并客	遊俠	幽并の客
6 当壚京兆妝	当壚	京兆の妝
7 向夕風煙晚	向夕	風煙 晩く
8 金羈滿洛陽	金羈	洛陽に満つ

【日本語訳】

1 百尺の高みから北の錢で築いた柵を見下ろすと
2 九本の都大路がすべて立派な宮殿に通じている
3 ヤナギの綿が砂埃の中で仄暗く見え
4 エンジュの葉が露を載せて輝いている

5 幽并から駆け付けた男伊達

6 都で流行の化粧をした飲み屋の娘たち

7 やがて夕闇迫る頃、旅の埃にまみれた男衆がやつと到着し

8 金で飾ったおもいがいが洛陽に満ちあふれる

【校勘】

○『古詩紀』卷百八

1 「瞰」、底本原作「瞰」。『詩紀』作「瞰」、今從之。

【押韻】

「堂」「光」、下平十一唐韻。「妝」「陽」、下平十陽韻。陽・唐同用。

【語釈】

1 百尺瞰金埒 2 九衢通玉堂

「百尺」二十四・二尺。長さ、深さ、高さをいうが、しばしば高い建物を指す。簡文帝「貞女引」に「借問懷春台、百尺凌雲霧（借問す 懷春台、百尺にして雲霧を凌ぐと）」と見える。

「瞰」見下ろす。謝靈運「郡東山望溟海」詩に「蕩志將愉樂、瞰海庶忘憂（志を蕩ひて將に愉樂せんとし、海を瞰て忘憂せんことを 庶ふ）」と見える。

「金埒」錢で築いた囲い。洛陽の北、芒山のふもとにあった。『世說新語』汰侈に「王武子被責、移第北邙下。

于時人多地貴。濟（王濟）好馬射、買地作埒、編錢匝地竟埒。時人号曰『金埒』。（王武子 責められて、第を北邸の下に移す。時に于いて人多く地貴し。濟 馬射を好み、地を買ひて埒を作り、錢を編み地を匝らせて埒を竟ふ。時人 号して『金埒』と曰ふ。）と見え、後に豪華な騎射場をいうようになった。また、庾肩吾「九日侍宴樂遊苑応令」詩に「塵飛金埒滿、葉破柳条空（塵 飛びて 金埒に滿ち、葉 破れて 柳条 空し）」とある。

「九衢」都にある九本の大きな道。『楚辞』天問に「靡萍萍九衢、臬華安居（靡萍、九衢、臬華、安くにか居る）」とあり、王逸注に「九交道曰衢。（九交の道を衢と曰ふ。）」とある。また、沈約「歲暮感衰草」（『玉台』卷九）に「彫芳卉之九衢、實靈茅之三脊（芳卉の九衢なるを彫ましめ、靈茅の三脊なるを實とす）」と。

「玉堂」立派な宮殿。宋玉「風賦」（『文選』卷十三）に然後倘佯中庭、北上玉堂、躋於羅帷、經於洞房、迺得為大王之風也。（然る後 中庭を倘佯し、北のかた玉堂に上り、羅帷を躋り、洞房を經て、迺ち大王の風為るを得るなり。）とある。また、鮑照「喜雨」詩に「驚雷鳴桂渚、迴洧流玉堂（驚雷 桂渚に鳴り、迴洧 玉堂に流る）」と。

3 柳花塵裏暗 4 槐色露中光

「柳花」柳絮、ヤナギの綿。晋・無名氏「子夜四時歌」

七十五首・春歌二十首其十二に「梅花落已尽、柳花隨風散（梅花 落ちて已に尽き、柳花 風に隨ひて散る）」と見える。

「塵裏」洛陽の道を行き交う車がたてる砂埃。沈約「細言応令」詩に「開館尺極余、築樹微塵裏（館を開く 尺極の余、樹を築く 微塵の裏）」と見える。また、徐陵「洛陽道」二首其一に「綠柳三春暗、紅塵百戲多（綠柳 三春に暗く、紅塵 百戲に多し）」とある。

「槐色」エンジュの葉の緑。柳と槐の組み合わせは梁元帝蕭繹「洛陽道」にも「青槐隨幔松、綠柳逐風低（青槐 幔に隨ひて松、綠柳 風を逐ひて低る）」とあった。

「露中」槐の葉に下りた露。鮑照「梅花落」に「露中能作実、揺蕩春風媚春日（露中 能く実を作し、春風に揺蕩して 春日に媚ぶ）」と。

5 遊俠幽并客 6 当壚京兆妝

「遊俠」男伊達。遊俠とも。

「幽并客」幽并は幽州、并州の地。今の河北省、山西省周辺。騎馬に長けた勇士を多く出し、昔から男伊達を好む氣風で知られた。一句、曹植「白馬篇」（『文選』卷二十七）に「借問誰家子、幽并遊俠兒（借問す 誰が家の子ぞ、幽并 遊俠の兒）」とあるのに拠る。

「当壚」「壚」は酒瓶を置くために設けられたかまどの形をした土の台。壚とも。「当壚」は酒屋の切り盛りをす

る。『史記』司馬相如列伝に「相如与俱之臨邛、尽売其車騎、買一酒舍酤酒。而令文君当壚。相如身自著犢鼻褌、与保庸雜作、滌器於市中。（相如 与に俱に臨邛に之き、尽く其の車騎を売り、一酒舍を買ひて酒を酤る。而して文君をして壚に当らしむ。相如 身に自ら犢鼻褌を著け、保庸と雜作し、器を市中に滌ふ。）」とあるのに拠る。ここは店番をする卓文君のような美しい女性をいう。簡文帝「賦得当壚」詩（『玉台』卷七）に「当壚設夜酒、宿客解金鞍（当壚 夜酒を設け、宿客 金鞍を解く）」と。

「京兆妝」都で流行しているお化粧を施す。『漢書』張敞伝に「（敞）又為婦画眉、長安中伝張京兆眉撫。有司以奏敞。上問之、对曰、『臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於画眉者』。上愛其能、弗備責也。（敞） 又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉の撫なるを伝ふ。有司 以て敞を奏す。上 之れに問ひ、对へて曰く、『臣 閨房の内、夫婦の私、眉を画くに過ぐる者有りと聞く』と。上 其の能を愛し、備さには責めざるなり。」とあるのに拠る。

「京兆妝」都で流行しているお化粧を施す。『漢書』張敞伝に「（敞）又為婦画眉、長安中伝張京兆眉撫。有司以奏敞。上問之、对曰、『臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於画眉者』。上愛其能、弗備責也。（敞） 又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉の撫なるを伝ふ。有司 以て敞を奏す。上 之れに問ひ、对へて曰く、『臣 閨房の内、夫婦の私、眉を画くに過ぐる者有りと聞く』と。上 其の能を愛し、備さには責めざるなり。」とあるのに拠る。

「京兆妝」都で流行しているお化粧を施す。『漢書』張敞伝に「（敞）又為婦画眉、長安中伝張京兆眉撫。有司以奏敞。上問之、对曰、『臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於画眉者』。上愛其能、弗備責也。（敞） 又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉の撫なるを伝ふ。有司 以て敞を奏す。上 之れに問ひ、对へて曰く、『臣 閨房の内、夫婦の私、眉を画くに過ぐる者有りと聞く』と。上 其の能を愛し、備さには責めざるなり。」とあるのに拠る。

「京兆妝」都で流行しているお化粧を施す。『漢書』張敞伝に「（敞）又為婦画眉、長安中伝張京兆眉撫。有司以奏敞。上問之、对曰、『臣聞閨房之内、夫婦之私、有過於画眉者』。上愛其能、弗備責也。（敞） 又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉の撫なるを伝ふ。有司 以て敞を奏す。上 之れに問ひ、对へて曰く、『臣 閨房の内、夫婦の私、眉を画くに過ぐる者有りと聞く』と。上 其の能を愛し、備さには責めざるなり。」とあるのに拠る。

7 向夕風煙晚 8 金羈滿洛陽

「向夕」夕暮れ時。陶淵明「歲暮和張常侍」詩に「向夕長風起、寒雲沒西山（向夕 長風 起ち、寒雲 西山に没す）」と。

「風煙」風と埃。風塵に同じ。謝朓「和王著作融八公山」

詩（『文選』卷三十）に「風煙四時犯、霜雨朝夜沐（風煙 四時に犯し、霜雨 朝夜に沐す）」とあり、旅の苦勞をいう。

「金羈」金で飾ったおもがい。曹植「白馬篇」に「白馬飾金羈、連翩西北馳（白馬 金羈を飾り、連翩として西北に馳す）」とあるように幽并の遊俠兒が乗る馬をいう。

陳・後主「洛陽道」五首其五

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|-------------|
| 1 青槐夾馳道 | 青槐 馳道を夾み |
| 2 御水映銅溝 | 御水 銅溝に映ず |
| 3 遠望陵霄闕 | 遠く陵霄の闕を望み |
| 4 遙看井幹樓 | 遙かに井幹の楼を見る |
| 5 黃金彈俠少 | 黃金 俠少弾き |
| 6 朱輪盛徹侯 | 朱輪 徹侯盛んなり |
| 7 桃花雜渡馬 | 桃花 渡馬に雜じり |
| 8 紛披聚陌頭 | 紛披として陌頭に聚まる |

【日本語訳】

- 1 葉が青々としたエンジュが天子が渡る道を挟み
- 2 宮中を流れる水が銅板で覆われた水路で輝く
- 3 遠くに雲にまで届くほど高い宮門を眺め
- 4 遙かに井桁の形をした楼台を見つめる
- 5 若い男伊達が黄金の玉をはじき

6 高位高官たちが乗る朱塗りの車が盛んに行き交う
7 風に散る桃の花びらが水路を渡る馬に降りかかり
8 ひらひらと洛陽の道に集まってくる

【校勘】

○『古詩紀』卷百八

0 底本注云「第五首原列下鄭渥詩後，拠『詩紀』卷九八及『百三名家集』移前」。

2 「御」、底本原作「緑」、拠同上改。

6 「盛徹」、底本原作「徹盛」、注云「拠同上改」。

7 「雜」、底本原作「離」、注云「拠同上改」。

【押韻】

「溝」「楼」「侯」「頭」、下平十九侯韻。

【語釈】

1 青槐夾馳道 2 御水映銅溝

「青槐」葉が青々としたエンジュ。後晋・王嘉『拾遺記』に「行者歌」として「青槐夾道多塵埃、龍樓鳳闕望崔嵬（青槐 道を夾みて 塵埃多く、龍楼鳳闕 崔嵬を望む）」とあるのを載せる。梁元帝蕭繹「洛陽道」に「青槐隨幔松、綠柳逐風低」、陳後主「洛陽道」五首其四にも「柳花塵裏暗、槐色露中光」とあった。

「夾馳道」天子の道を挟むように。「馳道」は都にある天子専用の道。謝朓「鼓吹曲」（『文選』卷二十八。本集

とあるのを引く。「闕」は宮城の門。

「遙看」遠くを見つめる。梁・虞騫「登鍾山下峯望」詩に「遙看野樹短、遠望樵人細（遙かに看る 野樹の短さを、遠く望む 樵人の細かさを）」とある。

「井幹楼」木を井桁のように積み重ねたような楼台。謝朓「同謝咨議詠銅雀台」詩（『文選』卷二十三）に「總幃飄井幹、樽酒若平生（總幃は井幹に飄り、樽酒は平生の若し）」とあり、李善注は「台之通称。」とする。或いは漢武帝が建てた楼台の名。建章宮の北にあった。班固「西都賦」（『文選』卷一）に「攀井幹而未半、目

眴眴而意迷。（井幹を攀ちて未だ半ばならざるに、目眴眴して意は迷ふ。）」とあり李善注は『漢書』郊祀志下に「乃立神明台・井幹楼、度五十丈、輦道相属焉。

（乃ち神明台・井幹楼を立て、度 五十丈、輦道 相ひ属く。）」とあるの引く。ここは前句「陵霄闕」との対から前者で解した。

5 黄金弾侠少 6 朱輪盛徹侯

「黄金」ここは金で作った弾丸。『太平御覧』卷四九六に引く『西京雜記』に「韓嫣好彈、以金為丸、一日所失者十余、長安為之語曰、『苦饑寒、逐彈丸』。京師兒童每聞嫣出彈、輒隨之望丸所落、便拾取焉。（韓嫣 弾くを好み、金を以て丸を為り、一日 失ふ所の者 十余、長安 之れが語を為りて曰く、『饑寒に苦しみ、弾丸を逐ふ』と。京師の兒童 嫣の出でて弾くを聞く毎に、

作「入朝曲」。）に「飛甍夾馳道、垂楊蔭御溝（飛甍 馳道を夾み、垂楊 御溝を蔭ふ）」とあり、李善注は『漢書』成帝紀に「太子不敢絶馳道。（太子 敢て馳道を絶らず。）」とあるのを引く。顏師古は応劭の「馳道、天子所行道也。若今之中道。（馳道、天子の行く所の道なり。今の中道の若し。）」の説を引く。

「御水」宮中の水路、またそこを流れる水。『後漢書』宦者伝・曹節に「盜取御水以作魚釣、車馬服玩擬於天家。（御水を盜取して以て魚釣を作し、車馬服玩 天家に擬す。）」とあり、李賢注に「水入宮苑為御水。」という。

「銅溝」銅で葺いた宮中の水路。陳後主「洛陽道」五首其三にも「左右關康莊、銅溝飛柳絮」と見えた。その

【語釈】参照。

3 遠望陵霄闕 4 遙看井幹楼

「遠望」遠くを眺める。『楚辭』九歌・湘夫人に「荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲（荒忽として遠く望み、流水の潺湲たるを觀る）」と見える。

「陵霄闕」雲よりも高い宮門。「陵霄」は雲にまで届くほど高いこと。凌霄とも。晋・郭璞「遊仙詩」七首（『文選』卷二十一）其三に「放情陵霄外、嘯藥挹飛泉（放情を放 にして霄外を陵え、藥を嘯らひて飛泉を挹む）」とあり、李善注は「淮南子」原道訓に「乘雲凌霄、与造化者俱。（雲に乗り霄を陵え、造化者と俱にす。）」

輒ち之れに随ひ丸の落つる所を望めば、便ち拾取す。）」と見える故事に拠る。

「弾侠少」まだ若い男伊達が弾き弓で丸を弾く。「侠少」は遊俠少年。

「朱輪」王侯など身分の高い者が乗る車。楊惲「報孫会宗書」（『文選』卷四十一）に「惲家方隆盛時、乘朱輪者十人。位在列卿、爵為通侯。（惲の家 方に隆盛なりし時、朱輪に乗る者 十人。位 列卿に在り、爵 通侯と為る。）」とあり、李善注は「二千石は皆な朱輪に乗るを得。」という。

「徹侯」秦が定めた二十等級の爵位の内、最高位に当たる。漢も当初は二十等級の爵位を踏襲したが、「徹侯」は武帝の諱を避けて通侯、或いは列侯と改称された。後に広く高位高官を指している。右に引いた楊惲「報孫会宗書」の李善注に「応劭曰、『旧曰徹侯、避武帝諱、故為通。言其功德通於王室也』。（応劭曰、『旧徹侯と曰ふも、武帝の諱を避けて、故に通と為す。其の功德の王室に通ずるを言ふなり。』）」とある。

7 桃花雜渡馬 8 紛披聚陌頭

「桃花」桃花と洛陽との関連は漢・宋子侯「董嬌饒」〔玉台〕卷一作「董嬌饒」詩。）に「洛陽城東路、桃李生路傍（洛陽 城東の路、桃李 路傍に生ず）」と見える。「渡馬」洛陽の水路を渡る馬。洛陽城には多くの水路が導かれ、周辺にも多くの河川があった。このような情

景は南朝の詩人たちにとつても想像し易かったのではないかと思う。梁・柳惲「贈吳均」詩三首其二に「遠遊濟伊洛、秣馬度清漳（遠遊して伊洛を濟り、秣馬清漳を度る）」と。

〔紛披〕風に吹かれて広がる様。双声。庾信「枯樹賦」に「紛披草樹、散乱煙霞。（紛披たる草樹、散乱たる煙霞。）」とある。また、漢・王褒「洞簫賦」（『文選』卷十七）に「其仁声、則若飄風紛披、容与而施惠。（其の仁声は、則ち飄風の紛披として、容与として恵みを施すが若し。）」と見えるのは穏やかに調和した様。

〔陌頭〕道端。路側。陳・後主「洛陽道」其二にも「佳麗嬌南陌、香氣含風好」とあり、その【語釈】に引いた梁・武帝蕭衍「河中之水歌」（『玉台』卷九作「無名氏」。）に「莫愁十三能織綺、十四采桑南陌頭」と見えた。